

外交と禅僧

——東アジア通交圏における禅僧の役割——

伊藤 幸司

はじめに ——「外交と禅僧」の歴史的前提——

中世日本の外交は禅宗の僧侶によって担われていた。当該期、日本列島をめぐる東アジアの海域世界では人・モノ・情報^{情報}の往来が活発に展開し、その交流を担う主要な存在が倭寇や海商といった海上勢力であり、禅僧であった「村井章介1988・第二章」。なぜ、宗教者たる禅僧が貿易活動や国家的な外交活動に関わったのかという点については、平安末期以降、日宋間の活発な貿易活動とともに日本列島へ移入された禅宗のあり方が大きく影響している。

41 外交と禅僧

禅宗は、一二世紀後半以降、博多津唐房に住蓄し、日宋貿易を担った宋商人^{しやうじん}と博多綱首^{きやうしゅ}によって、日本列島へ本格的に移植された。当時は、江南禅宗界が経済的・宗教的市場として日本に注目し、日本側も最新の大陸仏教への憧れから、途絶えていた入宋僧が再び増加するという時代であった。そのようななか、博多綱首は故国南宋で繁栄していた禅宗に交易の保障を求め、檀越として禅宗寺院を建立することで、その信仰生活を博多に移入し異国的世界を創出した〔伊藤幸司

2010〕。この結果、中世日本最大の国際貿易都市博多では「博多禅」が繁栄する〔川添昭二1989・第三章〕。鎌倉初期、博多綱首張国安らは入宋僧明庵^{めいあん}・西^{さい}を開山に迎えて、本邦初の本格的な禅寺聖福寺を創建した。聖福寺の山門には、そのことを誇るかのように「扶桑最初禅窟」の扁額が掲げられている〔川添昭二1988〕。鎌倉中期には、聖福寺の隣地に、博多綱首謝國明が入宋僧円爾^{えんに}を開山として承天寺を創建した〔川添昭二1987〕。これ以前、円爾は大宰府の地にも入宋僧随^じ・乗坊^{じやうぼう}湛慧^{たんけい}の建立した崇福寺を開堂していた。聖福寺や承天寺は「綱首の寺」として宋商人の交易活動と一体化し、大陸文物の移入に重要な役割を果たした。博多の禅寺は、創建以来、博多における貿易拠点であり、商船に便乗して渡海を果たす多くの入宋・入元僧や大陸僧の交流の場として存在していた〔川添昭二1983/1989・第三章〕。ゆえに、禅僧と貿易商人は禅寺を紐帯として出会い、寺内に海域交流の知識が蓄積されたことで、禅寺は大陸事情に精通した人的資源をも供給する場へと発展した。

日本の禅宗は、博多からさらに海陸交通の結節点であった

港町や政治都市京都・鎌倉へ展開することで徐々に列島社会へ定着していくが、それぞれの禅寺や禅僧は孤立していた訳ではなく、相互に様々な禅宗ネットワークで結ばれていた〔伊藤幸司 2006〕。このネットワークは、博多からさらに海を越えて、禅宗の淵源ともいえる江南禅宗界のみならず、朝鮮半島の高麗禅林とも結び付き、一五世紀には琉球列島にまで展開した。禅宗界は、まさに東アジア全体を国境を跨いで形成されていたのである〔伊藤幸司 2010〕。

このような禅宗の国際的特性が、一三世紀以降の日本外交に禅僧が携わっていく歴史的前提となったのである。

一 蒙古襲来と禅宗勢力

一三世紀、ユーラシア大陸を席卷したモンゴルの登場は、日本と大陸の間にも緊張関係をもたらした。一二六七年、フビライの国書を携えて来日した高麗国の潘阜を皮切りに、モンゴル側は日本と好を通じることを求めた。九世紀末期の遣唐使廃止以降、大陸に向けて正式な国交を結んでいなかった日本は、一貫してモンゴルの国書に返書をしないという方針を執った。この政策のイニシアティブを握ったのは、古代以来外交権を有していた朝廷ではなく鎌倉幕府（得宗政権）であった。この外交判断は、日本列島を取り巻く国際状況を全く把握せずに行われていた訳ではない。

平安末期以降、宋代仏教を希求する多くの日本僧が大陸へ渡航していたが、鎌倉中期の建長年間以降になると江南禅宗界の禅僧の来日（渡来僧）も急増し、一三世紀半ばからの約

一〇〇年間は「渡来僧の世紀」ともいえる時代となった〔村井章介 2005・第二章〕。この背景には、北条得宗家が多く渡来僧を大陸から招聘し、独占的に確保することで禅宗受容を熱望する諸氏に対して得宗政権の權威を維持しようとする思惑があった〔斎藤夏来 2008・第二章〕。そして、多くの渡来僧や帰国した入宋・入元僧の受け皿として北条得宗家が都市鎌倉に建立したのが建長寺や円覚寺であった。建長寺は、一二四九年、北条時頼の発願によって創建され、南宋から来日していた蘭溪道隆を開山とした禅寺であり、円覚寺は北条時宗が建長寺第五世であつた無学祖元を開山に招聘して創建した禅寺である。両寺に招聘された渡来僧には、大陸でも相應の名声を馳せた高僧も多く、両寺の開創を契機として鎌倉には禅宗が定着し、大陸文化の受用口としての役割を果たす異国的空間が形成された〔川添昭二 1989・第三章〕。江南禅宗界と直結する鎌倉の禅寺は、多くの渡来僧や帰国した入宋・入元僧によつて最新の大略情報が恒常的にもたらされたことから、鎌倉における国際情報センターの様相を呈していた。その結果、得宗政権は大陸情報の供給源として、建長寺や円覚寺など麾下の禅寺に集住する禅僧たちを位置付けることができた。いわば、鎌倉禅林の禅寺・禅僧たちは得宗政権の外交能力を補完する存在であつた。

特に、モンゴルの脅威に直面した北条時宗は、大陸の著名な高僧を積極的に招聘して鎌倉禅林の住持に就けるように努力しているが、これは彼のモンゴル対策の一環といえる。渡来僧のなかには、例えば、建長寺第二世となつた兀庵普寧の

ように江南へ帰国してしまふ者もいたが、彼はその後日本にいる円爾や東嶽慧安、六波羅南殿（北条時輔、時宗の義兄）らへ書簡を通じて大陸の動静を頻繁に伝えている（1）。また、時宗が江南禅宗界に求めた石帆惟衍の法語を携えて一二七一年に來日した西澗子曇も、最新の江南事情を伝えた後、新たな高僧の招聘を思い立った時宗からその根回しを依頼されて帰国している〔葉貫磨載1983・第二章第二節〕。この成果として無学祖元が時宗の招聘に応じて來日することになるが、この間、西澗子曇も兀庵普寧と同様、書簡を通じて大陸の動静を伝えていた（2）。そして、一二九九年には日本招諭のために派遣された蒙古国信使一山一寧に同行して西澗子曇は再来日している。このように、モンゴル襲来前後の日中禅林では、日本僧のみならず渡來僧でさえも東シナ海を往復する程、活発な交流があった。この結果、北条時宗は、禅僧によつて鎌倉にもたらされた大陸情報を獲得することによって、襲来前から既にモンゴルに対する一定度の知識を共有することができたのである。

ただし、その大陸情報は江南禅宗界を有する南宋の立場から語られるものであった。例えば、時宗の精神生活にも深く関わつた無学祖元は、來日前にモンゴル兵から刃を突きつけられ、「臨劍の頌」を悠然と唱えることで難を免れるという経験をしており、彼の伝える大陸情報とは即ち故国南宋（江南禅宗界）を侵略しようとする征服民族モンゴルの姿であった（実際、南宋は一二七九年にモンゴルによつて滅亡）〔川添昭二1999・第三章〕。無学祖元に代表される南宋寄りの大

陸情報が、その後の得宗政権の外交方針に少なからず影響を及ぼしたであろうことは想像に難くない。

一方、得宗政権と連繋し、鎮西奉行として九州大宰府という最前線でモンゴル対策を講じていた武藤少武氏もまた、博多や大宰府で活動する渡來僧や入宋帰國者、あるいは貿易商人（博多綱首）などを通じて大陸情報を収集していたと思われる。特に、博多の聖福寺や承天寺、大宰府の崇福寺は、渡海求法する入宋僧や渡來僧が來日した直後に必ず関与する場であり、これらの諸寺が情報の主要な供給地であつたことは想像に難くない。ここから発信された大陸情報の一部は、恐らく禅宗界のネットワークや少武氏を介する幕府の伝達ルートによつて鎌倉へもたらされたと思われる。

しかし、数度のモンゴルの国書到來によつて高まる危機感に対し、得宗政権と大宰府の少武氏はモンゴル対策の上で、最新の大略情報により精通し、かつ得宗政権とも密接な禅僧を必要とした。ここで登場するのが南浦紹明という禅僧である。彼は駿河国安倍郡の出身で、郷里の建穂寺の淨弁について学んだ後、鎌倉建長寺の蘭溪道隆のもとで禅僧となつた。一二五九年入宋して虚堂智愚の会下に入り、彼の淨慈寺や径山移住にも随從した。虚堂智愚は南浦紹明の能力を見抜き、自らの禅風が彼によつて日本で盛大になることを予言するほどであつた（『送日本南浦知客』『虚堂和尚語録』卷一〇）。一二六八年頃に帰国した彼は、再び建長寺の蘭溪道隆に参じるが、一二七〇年、得宗政権の意向によつて筑前下向し、姪浜の興徳寺に住することになる。興徳寺は、北条時

宗の叔父にあたる時定によって創建された禪寺で、南浦紹明が開山となつてゐる。彼の筑前下向は、得宗政権によるモンゴル対策の一環として捉えることが可能である。即ち、南浦紹明は北条得宗家と密接な建長寺に長く滞在した北条一族寄りの禪僧であり、かつ日元關係が次第に緊迫していく最中に、最新の大略情報をもつて帰国した人物であつた。得宗政権とすれば、まさに対モンゴル外交の顧問的役割をあてがう人物として最適任であり、大宰府守護所(少貳氏)の外交経験不足を補充する者として期待することが可能であつた。それを裏付けるように、南浦紹明はモンゴルの使者として一二七一年に來日した趙良弼と会見し、詩文の交歓を行つてゐる(『大応録』卷下「和蒙古国信使趙宣撫額」)(『川添昭二』1968・第三章)。そして、興徳寺に入寺して三年目の一二七二年、彼は少貳氏が外護する大宰府横岳の崇福寺に入つたが、これは同寺のほうが少貳氏を補佐する上で都合がよかつたからであらう。当時、崇福寺と少貳氏は一体の關係にあつた。南浦紹明は、少貳資能との關係も密接であつたようである。資能の死に際して、非常に丁寧な詩文を残している(『大応録』卷下「太宰府都督少卿禪門秉火」)(『川添昭二』1968)。

当該期以降、得宗政権は南浦紹明のように大陸情報に精通し、かつ政権と密接な禪僧(例えば藏山順空や寒巖義尹)を、九州地域の交通の要衝にある禪寺へ配置している。この傾向は、特に博多で顕著であり、聖福寺には渡來僧である蘭溪道隆や大休正念らの弟子筋が次々と入寺し、承天寺へは入元僧を弟子に多く有する南山土雲が入寺した。まさに、鎌倉

末期の博多の禪寺は鎌倉と直結する存在であり(「上田純一2000・第二章第一節」[伊藤幸司2006a]、承天寺の南山土雲は鎮西探題の対外交渉上の頭脳と位置付けられていた[『川添昭二』1968]。さらに北条一門は、博多から航路で繋がる港町の禪寺の開基檀越となつてゐる。得宗政権は、海陸交通の結節点である港町の禪寺を確保することで、港町を結ぶ禪宗ネットワークを押さえ、人・モノ・情報の掌握という点でモンゴル襲來への対応策としたのである[伊藤幸司2006a]。この頃、得宗政権は北条一門と密接な親尊や忍性に代表される西大寺系律僧も利用して交通拠点の掌握に励んでいた[河合正治1968]「網野善彦1974」。律宗は、禪宗と同じく宋代に成立し元代にも継承された「禪教律」十宗親という大陸の仏教觀を共有する存在(『禪律仏教』)であり「大塚紀弘2003」、得宗政権は顕密仏教勢力とは異なる新たな仏教勢力をも活用することで、未曾有の対外的危機に対処しようとしたのである。

いずれにせよ、日本禪林の禪僧が外交という極めて政治的な行為に携わつていくことになつたのは、モンゴル襲來という外的要因が契機となつたことは間違いない。二度の襲來後、モンゴルは一二八四年に補陀山の宝陀寺住持愚溪如智を副使として国信使を派遣した(前年にも來日を試みるが暴風雨で漂流し失敗)、一二九九年にも同じく宝陀寺の一山一寧に妙慈弘濟大師という号と江南諸路釈教總統(旧南宋治下の江南における仏教界を統括する長官)の肩書きを与えて、国信使正使として派遣した[西尾賢隆1999・第二章]。舟山列島

の補陀山（普陀山）は、博多―慶元（寧波）を結ぶ大洋路上の要衝で、海難を救う観音靈場として内外の信仰を集めており、宝陀寺も日本の慧尊が開山として伝承されているように、日本との因縁が深く、日本でも広く知られる所であった。従来、モンゴルは官人を国信使として派遣していたが、当該期に至って、仏教国である日本を招諭するために、日本とゆかりのある宝陀寺の禪僧を使僧として起用するという方針に転向したことが分かる。この背景には、得宗政権が渡來僧や入宋・入元帰國僧らを外交顧問的位置付けとして起用していたことと少なからず関係があるものと推測される。この場合、モンゴルは日本の文化のみならず、交流実態に合わせる形で国信使を派遣したことになる。

二 高麗・朝鮮・明と中世日本

1 日麗通交と日麗禪林

一三三三年、日本では得宗政権が滅亡し、建武政権が誕生するものの、その数年後には足利尊氏によつて室町政権が成立した。室町政権による列島外への眼差しとしては、一三四二年に日元貿易が復活した際、足利直義が天龍寺造宮のため天龍寺給（天龍寺造宮料唐船）を元へ派遣したことに始まる。この派遣に際しては、室町政権による新たな渡來僧の招聘活動という側面もあったが〔榎本涉 2006〕、いずれにしても国家外交という範疇ではなかった。室町政権最初の外交経験は一四世紀半ば過ぎの高麗からの接触に始まる。

一三六七年、活発化する倭寇の禁圧を求めて、元の征東行

中書省の使者金龍と高麗の使者金逸が日本に派遣された。この外交使節に実際に対応したのが室町政権であり、足利義詮は春屋妙葩に僧録の肩書きを与えて返書させ、翌年に天龍寺の梵盪と梵鏐を派遣した〔中村栄孝 1965・第六章〕。春屋妙葩は、夢窓疎石の弟子であり、俗縁でも甥にあたる人物である。夢窓疎石は、五山派が禅宗界最大の勢力にのし上がり、幕府・朝廷と極めて親密な関係を取り結ぶに至った最大の功労者であり、仏光派から独立して夢窓派という門派勢力を確立した人物であった。春屋妙葩は夢窓の後継者として夢窓派を統率し、五山を制度として完成させ、それに幕府外交の実務機関〔外交機関としての五山〕としての性格をも附与することに尽力した〔玉村竹二 1981 / 1983〕〔村井章介 1988・第七章〕。彼は、この一件を契機として、その後の室町政権の外交活動に深く関与していく。

ところで、この時の高麗と室町政権の外交交渉には入念なバックアップがあった。実は、春屋妙葩とその会下の禪僧たちが、一連の外交折衝の裏で交渉がスムーズに進むように暗躍していたのである。春屋妙葩は、高麗使の来日を幕府の仁徳が及んだ成果だと喧伝し、伝統的に朝鮮蔑視を抱く政権首脳陣との溝を埋める苦心をした。彼の下には従書記という「高麗生縁」（高麗生まれ）の者がおり、高麗使側にも禅雲寺長老延銅という禪僧が随行していた。延銅は太古普愚と旧知の仲であり、太古の下には日本僧も参禅していた。太古は、会下の日本僧から最新の日本事情を収集していた可能性がある〔藤田明良 2008〕。この後、従書記は天龍寺の梵盪と梵鏐

に随行することで高麗へ帰国するが、これも春屋妙葩の対高麗外交対策の一環であったと推測される。

ここに見るような従書記のあり方は、その後も継承されている。一三七五年、高麗は再度の倭寇禁圧を求めて羅興儒を派遣するが、彼は間諜と間違えられて捕らわれてしまう。その彼を救ったのは、若い頃に日本僧に従つて来日していた高麗晋州出身の良柔という禅僧であった(『高麗史』卷一「四・列伝・羅興儒伝」、「高麗史節要」辛卯二年一〇月条)。その後、良柔は徳吏周佐の返書を携え、室町政権の使者として羅興儒とともに高麗へ渡海している(『高麗史』辛卯二年一〇月条)。良柔の同行者には、高麗に渡海経験のある中庵寿允もあり、彼はこの渡海時に太古普愚から道号偈を獲得したものと考えられる[藤田明良2008]。このように、当該期における日麗通交の復活と展開は、それまで行われていた日麗禅林の交流を前提とした日本側と高麗側の禅僧による表裏の協力で実現したのである。

倭寇問題を契機に始まった日麗通交は、その後、室町政権のみならず、倭寇禁圧に実効力のあった九州探題今川了俊や大内義弘との間でも進展した。そして、これらの通交を担ったのは高麗側が官人であるのに対し、日本側は禅僧であった。一三六八年には、日本使慶菊侍者が渡海しているが、彼には対馬島主崇宗慶も土物を託していた(『高麗史』卷四一・恭愍王一十七年七月乙亥条・一一月丙午条)。一三七七年には九州探題今川了俊が僧信弘を派遣し、倭寇禁圧には困難を伴うがその用意がある旨を高麗側に伝えた。高麗側は了俊の意

を称賛し、鄭夢周を派遣することで了俊への報聘とした[岡本真2007]。これを受けて、翌年、了俊は信弘とともに倭寇討伐のための軍六九人を率いて渡海させ、一定度の戦果を挙げた。以後、高麗は倭寇禁圧要請を室町政権ではなく、九州の実力者に対して頻繁に行うようになった[川添昭二1986・第五章]。ここにもみる使僧信弘は、僧侶でありながら倭寇との戦闘を行っており、その多面的な能力を窺うことができる。

一三九二年、李成桂が高麗国王からの禅譲という形で新たな国家朝鮮王朝を誕生させた。しかし、朝鮮半島と日本列島との通交関係は高麗末以来の交流形態がそのまま維持された。例えば、李成桂が初めて室町政権に派遣した使僧覚鑑に対して、室町政権は絶海中津に返書をさせ中庵寿允を渡海させている[田中健夫1975・第三章]。中庵は、以前にも幕府の使節として高麗へ赴いたことのある人物である。また、一四世紀末期の日朝通交の場で活躍する禅僧に梵明なる者がいる。彼は朝鮮僧で、日本回礼使金巨原とともに被虜人の送還に従事したり、九州探題今川了俊の使者に度々同行し、朝鮮に猿を献上することもあった(『太祖実録』三年五月丙寅条・七月庚戌条・六年一〇月己卯朔条)。日本と朝鮮は、このような日朝両国を縦横に往来する禅僧をはじめとする媒介者によつて交流することができた。一三九九年、室町政権(足利義満)が、大内義弘を仲介として朝鮮との間に正式な外交関係を成立させることができたのも、その交流を実際に支える高麗末以来の両国仏教界の交流があったからなの言うまでもない[橋本雄1998b]。

朝鮮は、倭寇対策として倭寇を平和な通交者へと変質させるために、多様な日本側通交者を受け入れた。このため、多くの倭人とともに、玄界灘地域の杜寺も独自に朝鮮通交を行った。このなかには、宍岐安国寺、博多承天寺や慈雲庵(曹洞宗)「上田純一 2000・第二章第四節」の禅僧もおり、大蔵経求請や被虜人送還といった独自の通交を展開した「伊藤幸司 2010」。これらは、世宗期以降の通交統制によって途絶えるものの、その後は地域権力の外交を担う存在へとシフトしていった。

2 初期日明通交と日明禅林

一三六八年、元末の動乱を制した朱元璋が即位し「大明」を建国した。海禁・朝貢システムを導入していく明朝の成立は、東アジア海域世界に大きな秩序変動をもたらした。即ち、明との通交は明から冊封された各国の国王が派遣する遣明使(官船)に限定され、民間貿易船(民船)が締め出されることになったのである。

明と日本との接触は、洪武帝の「四夷君長」への遣使入貢の呼びかけに始まる。当初、明側は日本へ派遣する明使に揚載・趙秩(一三七〇年)のような官人を起用していたが、一三七一年に征西將軍懷良親王が「良懷」名義で僧祖来と僧九人を派遣して入貢すると(『太祖実録』洪武四年一〇月癸巳条)、冊封使として仲猷祖闡(明州天寧寺/禅僧/大慧派)と無逸克勤(南京瓦官寺/天台僧)という禅僧+天台僧の組み合わせの使節を派遣した。これに先立ち、洪武帝は元末に

入元し、そのまま明代の江南地域に滞在していた日本僧梅庭海寿を招請し、日本の国内情勢について詳細な質問をしていた。洪武帝は、以後も無我省吾や絶海中津など大陸に留学していた日本僧をしはしばしば引見して情報収集を行っていた。そして、梅庭海寿と、同じく入明していた権中(中興を、日本へ渡海する冊封使仲猷祖闡と無逸克勤の通事として随行させた「葉貫磨哉 1983・第四章第三節」「上田純一 2006」)。洪武帝が、大陸にいる日本僧を通じて日本情報を獲得し、対日外交に利用していたことは明らかといえる。

明側が冊封使として禅僧と天台僧を選択した背景には、明における禅宗重視策がある。明朝では、元朝以来、仏教諸宗派のなかで最も優勢であった禅宗の僧侶が、中国仏教界全体を統制する普世院(後の僧録司)の職掌において中心的役割を担っていた(ただし、一部の職掌は天台僧も担当していた)。特に、元末に蒲室疏法四六駢儷文を完成し、『蒲室集』を著した笑隱大訥を輩出した大慧派の禅僧がその中枢を占めた。明初に普世院が設置されたのが、笑隱大訥が開山した龍翔寺の寺名を改めた「大天界寺」であったことは象徴的といえる。明代の禅僧は、皇帝に密着した極めて政治的な存在であったため、大慧派の禅僧たちは明初の仏教界のみならず中央政界においても強大な権力を形成した。しかも、建国当初、大慧派禅僧の多くが洪武帝の使者として近隣諸国へ頻繁に派遣されていた。禅僧が派遣された国には、日本以外にも吐蕃・省合刺国・西域などがあり、尼巴辣にはラマ僧が派遣されていた。明は正式な通交関係(朝貢関係)が成立してい

ない国で、仏教が盛んな地域へは、仏僧を使者として派遣していたのである。僧侶の派遣は、相手国に対する一種の懷柔であり、僧侶を通じて朝貢關係の形成や促進を達成しようと試みたのである〔上田純一 2006〕。日本に仲猷祖闡（禪僧／大慧派）と無逸克勤（天台僧）が派遣されたのも、明が日本の実情を勘案した結果といえよう。時代はやや降るが、一四〇二年、足利義満を冊封するために来日した冊封使天倫道彝（揚州天寧寺／禪僧／大慧派）と一庵一如（天台僧）に関して、〔唐土カラ日本ニハ禪宗ト天台宗トカ盛ナトテ、禪ニハ天倫、台宗ニハ一庵ヲコチヘ渡サレタソ〕（勅修百丈清規雲桃抄）（建仁寺兩足院本）巻上）〔海老根聰郎 1973〕との記載があるが、この認識は仲猷祖闡と無逸克勤の派遣に当たっても同様であつたと思われる。

このような明の外交方針に敏感に反応したのが足利義満であり、既に高麗との通交關係を主導していた春屋妙葩であつた。当初、懷良親王を冊封するために来日した仲猷祖闡らであるが、懷良の没落に伴い、最終的に交渉相手は足利義満へと変更している。当該期、明との通交を望んでいた義満は、春屋妙葩やその周辺の入明帰国僧から最新の大陸情報を手に入れている。例えば、当時、管領細川頼之と対立し丹波雲門寺に退隠していた春屋妙葩は、一三七〇年懷良親王に入貢を勧めた明使揚載の一行で帰国することなく博多や山口に居残つた趙秩や朱本、そして一三七二年に来日した仲猷祖闡や無逸克勤と頻繁に詩文や書簡のやりとりをしていたことが〔雲門一曲〕から分かっている〔村井章介 1988・第六章〕。義堂周

信も入明僧等がもたらす大陸情報を収集していたことが、その日記『空華日用工夫略集』から窺い知ることができる〔西尾賢隆 1989・第七章〕。同時期、明の洪武帝が大陸にいた入明僧から日本情報を入手していたように、日本の足利義満も彼らを通じて大陸情報を獲得していた訳である。日明両国の情報媒介者としての禪僧の姿が浮かび上がってくる〔上田純一 2006〕。

こうしたなか、一三七四年足利義満は仲猷祖闡らの帰国に合わせて、室町政権最初の遣明使として聞溪円宣・子建浄業・喜春らの禪僧を派遣した。ただし、この時に限らず義満の遣使はことごとく洪武帝から入貢を拒否され、彼の念願が成就するのは洪武帝死後に即位する建文帝の治世まで待たねばならなかった〔小葉田淳 1941・第一章〕〔田中健夫 1975・第二章〕〔佐久間重男 1989・第一部第一章〕〔橋本雄 1985〕。そして一四〇一年、祖阿（同朋衆）・肥富（筑紫商客）らを使節とする義満の遣明使が建文帝に受け入れられた。この背景には、叔父の燕王朱棣を牽制するための意味合いがあつたことが指摘されている〔村井章介 1989〕。おそらく、義満は建文帝をめぐる大陸情報を把握した上で、ここを入貢の好機と捉えて遣使をしたのであろう。この時、遣明使の正使・副使は禪僧でなかったが、絶海中津に従学した仲方中正（夢窓派）が随行し、具体的な外交実務を取り仕切っていたと考えられている〔高橋公明 1985〕。建文帝は翌年、早速、義満を日本国王に冊封する冊封使として天倫道彝・一庵一如らを派遣した。

冊封使が来日すると、義満は冊封使から日本国王に封じられる受封儀礼を執り行う必要があった。この受封儀礼を実質的に背後で差配していたのが、明初の日明交渉の窓口であった南京天界寺で、明の規定する外交儀礼を習得していた可能性が高い入明帰国僧たちである。ただし、彼らは明側の礼式に準拠して、義満に卑屈な態度を強要するような受封儀礼を執り行ったのではなく、実際には仏教色を強調し、義満が明国書に遜る姿勢を意図的に排除することで、結果的に義満が尊大な態度で受封されるよう変容させていた〔橋本雄三2008〕。そして、義満はこの冊封使の帰国に合わせて一四〇三年に回礼の遣明使を派遣するが、その国書（遣明表）は入明中に李潭宗勸（笑隱大新の弟子）から蒲室疏法を学んだ絶海中津が起草し、構成員は正使堅中圭密（天龍寺／禪僧／夢窓派）以下、祥庵梵雲（禪僧／夢窓派）や明空志玉（廬山寺／天台僧）らが伴うものであった。このメンバーが、禪僧＋天台僧で構成された明の冊封使を意識した結果であることは言うまでもない〔伊藤幸司2009〕。さらに、当該期、春屋妙葩・絶海中津やその周辺の夢窓派禪僧が、明の大慧派禪僧に語録の序文・跋文や塔銘の起草を依頼し、頂相への著賛要請を積極的に展開している〔村井章介1988・第七章〕〔上田純一2006〕〔伊藤幸司2009〕。この一連の行為は、幕府外交を支える春屋・絶海系の夢窓派が、明で絶大な存在感を示す大慧派と可視化したコネクションを確立することで日明通交を盤石なものとし、日本における政治外交上の地位を確立しようとしたからである〔伊藤幸司2009〕。

一四〇三年の回礼の遣明使は、靖難の変を経て実権を握った永楽帝からも日本国王の正式な通交（朝貢）として認知され、一四〇四年に永楽勸合・大統領・「日本国王之印」金印などの下賜を受け、明使趙居任を伴って帰国した。以後、日明関係は日明勘合による渡航制度が確立し、遣明船の派遣活動は安定的に展開されていく。同時に、明は朝貢関係が安定化した国に対しては、相手国の状況を考慮することなく、官人を使節として派遣した。一四〇四年の明使が趙居任という官人であったように、以後、日本へ派遣される明使は一貫して官人となり、僧侶の姿はなくなる。一方、室町政権側も日明通交が安定化したことで明の手法に固執することなく、外交活動を実績のある禪僧に任せ、外交僧としての天台僧の姿は消えていった〔伊藤幸司2009〕。

3 「外交機関としての五山」の成立・変容・解体

モンゴル襲来を契機として外交に携わることとなった禪僧は、得宗政権のもとで制度上その地位を明確に位置付けられていた訳ではなかった。しかし、一四世紀後半、高麗が倭寇禁圧問題を契機に外交使節派遣という形で日本へ接触し、大陸で海禁・朝貢システムという新秩序の構築を目論む明が成立すると、新たに誕生した室町政権は国家外交への関与を余儀なくされた。特に、海禁・朝貢システムは、明の認める国王にのみ遣明船派遣を許可するものであったから、事実上、莫大な利益を生み出す対明交易の貿易利権とも連動していた。ゆえに、室町政権（足利義満）も日本列島にいる競合他

者を排除し、明の認める日本国王として、日明通交という国家外交の樹立とその安定化に努めざるを得なかった。その際、日麗通交や日明通交という国家外交を表裏の舞台で支えたのが、東アジアを跨ぐネットワークを張り巡らし、各国の政権中枢にも参入していた禅宗勢力であった〔伊藤幸司 2010〕。禅宗界は、日麗禅林・日中禅林相互で頻繁な人的往来があり、それに伴い各国の情報も禅林内に流入していたため、禅僧は新たな国家外交という交流を担う存在として注目された。室町政権が、高麗との外交で春屋妙葩を活用したのは、それまでの日麗禅林のあり方を鑑みれば必然であった。その後、日明通交の問題に直面した際も、明における禅宗重視策とその外交手法を考慮すれば、明皇帝に近侍し、善世院をも掌握する大慧派禅僧とのコネクションがある春屋妙葩・絶海中津系統の夢窓派勢力を、足利義満が積極的に起用したのも当然といえる。

また、民間交流とは一線を画す国家外交では、外交文書の起草や外交儀礼の遂行、外交折衝における漢詩文の交歓などの文化交流〔村井章介 1986・第一／四章〕に適應できる知識や技術が不可欠となる。日本の禅僧は、中国の士大夫の教養を有していたことから、四六駢儷文を用いる遣明表や古典的比喩を駆使する漢詩文を作成する能力があり〔西尾賢隆 1989・第八／一〇章〕、大陸留学を通じて受封儀礼の知識を獲得し〔橋本雄 2008〕、一部は大陸の言語にも精通していたため〔榎本涉 2003〕、外交を担う集団としては理想的であった。もちろん、このような知識の一部は公家社会や顕密勢力

でも共有されていたものの、朝鮮蔑視観のような伝統的対外観や神国思想を強く抱く彼らが室町政権の外交官として働き、異国に赴くことは有り得なかった。その意味でも、大陸的要素が極めて強く、中国禅宗界との接点を重要視し憧れる禅僧の姿は外交官として適していた。この結果、初期室町政権の外交を担ったのが春屋妙葩とそのエコール（法統・学統集団）であり〔村井章介 1986・第七章〕、そのエコールの一員で春屋妙葩の後継者ともいえる絶海中津とそのエコールであった〔橋本雄 2007〕。ここにいわゆる「外交機関としての五山」が誕生する。

室町政権の「外交機関としての五山」というあり方は、夢窓派を中心とする京都五山系の禅宗勢力にとっても非常に有意義であった。明への渡航手段が遣明船に限定された結果、事実上、日本僧として入明が可能であったのは外交僧たる禅僧のみということになり（初期段階は一部に天台僧も参加）、日元通交の段階までは入元していた律僧などの他宗派勢力は大陸との関係がシャットアウトされた。朝鮮通交の場では、室町政権の派遣する日本国王使の本質が朝鮮への大蔵経求請にあり、遣朝鮮国書の起草僧の選任やその作成を当初は鹿苑僧録、後に蔭涼職が職掌とした結果〔橋本雄 1997〕、京都五山系勢力が日本国内で需要の高かった高麗版大蔵経を獲得しやすい立場となった〔橋本雄 1998〕。京都五山系の禅宗勢力からすれば、室町政権の外交を担うことは顕密勢力に対抗し得る極めて有力な手段であったといえる。

室町政権による初期外交は、国境を越える前代からの禅僧

の交流を基礎とした外交活動である側面が強かった。しかし、日明関係が安定化し入明の手段が日本国王名義の遣明船に限定される一方、日朝関係でも日本列島からの多様な渡航者の受入を峻別する世宗期以降の通交統制策が実施されると、国境を越える禪僧の往来も外交使節が主体となり、禪林相互の交流も極めて限定的なものとなった。同時に、室町政権の下で五山官寺制度が整備され、五山系臨濟禪を管轄する鹿苑僧録(相国寺鹿苑院主)や、僧録と將軍の媒介者としての蔭涼職(鹿苑院蔭涼軒主)が組織として確立した〔今枝愛眞 1970〕。ここに至って、一五世紀以降の新たな外交秩序の下、鹿苑僧録や蔭涼職の職掌の一部として外交事務が明確に位置付けられ〔田中博美 1987〕〔橋本雄 1997〕、五山で徐々に蓄積された先例に基づいて外交が運営されるようになったことで、室町政権の「外交機関としての五山」が完成し、外交を担う禪僧のあり方も明確化したのである。一五世紀半ば頃、鹿苑僧録を勤め、第一次応仁度の遣明使の携帯する遣明表も起草した瑞溪周鳳が、「近者大將軍は國を利せんが為の故に、竊かに書信を通ず。大抵は僧を以て使と爲し、其の書もまた僧中より出るのみ」〔善隣国宝記〕卷中・四号文書〔田中健夫 1995〕と記し、朝鮮で『海東諸国紀』を著した申叔舟が「竊かに海東諸國を觀るに、凡そ信札においては必ず絶流に命ず」〔保閑齋集〕卷九と称したことは、当該期日本の外交における禪僧の立場を最も端的に表している。

ところで、「外交機関としての五山」は京都相国寺を拠点とする夢窓派勢力がその中枢的活動を展開していたが、五山

自体は禪宗界の派閥ともいえる多様な門派によって構成されており決して一枚岩ではなかった。五山のなかには、夢窓派に比肩し得る勢力として東福寺を本拠とする聖一派(派祖は円爾)や、五山の枠外(山隣派あるいは林下)へも勢力を伸張させていた大応派(派祖は南浦紹明)以外にも、大覚派・大鑑派・一山派・幻住派などの諸勢力が混在していた。室町政権の外交活動は、遣明使も遣朝鮮使も京都五山周辺の禪僧によってのみ支えられていた訳ではない。京都を出発する使船の旅は、兵庫や堺から出発した後、瀬戸内海から北部九州地域の港町の禪寺に寄港しながら大陸を目指したし〔伊藤幸司 2002〕、使船の機装は博多や兵庫、堺などの貿易商人によって担われていた。この結果、使節の構成員へもこれらの港湾都市に展開する禪宗勢力の禪僧が多く乗り込んでいたのである。既述したように、中世日本最大の国際貿易港博多では、平安末期以来、禪寺を紐帯として海商と禪僧とが密接な関係を形成しており、禪寺が港湾都市の貿易センター的役割を果たしつつ、通交貿易の人的資源を輩出していた。このような実態は、瀬戸内海沿岸から九州地域の貿易都市でも少なからず確認することができる。そして、博多のような港湾都市で積極的に勢力を展開していたのが聖一派、大応派、大覚派など夢窓派以外の門派であった。この結果、例えば、足利義持が日明関係を断絶した後、義教が日明通交を復活させる使節(第九次永享四年度の遣明使)として正使に抜擢したのは博多聖福寺の龍室道淵(大覚派)であり、文明年間の堺発の遣明船では当地で教線を拡大する聖一派寺院勢力が密接に

関与していた「伊藤幸司 2002a」。この傾向は、幕府・五山の財政が凋落し、独自の使節経営に堪えなくなった一五世紀中葉以降、室町政権が日明勘合を社寺や大名に切り売りし「橋本雄 1968a」、朝鮮へ特定寺院のための大蔵經求請を行うようになること「関周 1997」、より顕著となる。遣明船であれ遣朝鮮船であれ、渡航証明書を獲得した者（社寺や大名）が実質的な使船の経営者として、自らの意を受けた外交僧を抜擢したからである。そして、そのような経営者には独自の外交僧を抱える大内氏のような地域権力もいた。

当該期の日本では、大内氏のように室町政権以外でも外交活動を展開する地域権力が存在した。大内氏は、一四世紀末期に倭寇問題を契機として高麗・朝鮮との通交関係を独自に樹立し、一五世紀中葉以降は日明勘合を獲得して遣明船に参画し、琉球通交も展開した。この広範な外交活動を支えたのが、博多の禅寺・禅僧であり、根本領国ともいえる防長（周防国・長門国）地域の禅寺・禅僧である。聖福寺・承天寺・妙楽寺に代表される博多の禅寺には、平安末期以来蓄積相伝される対外交流のノウハウが存在し、創建以来、有力貿易商人から支持されていたため、大内氏はその人的資源を獲得するべく博多支配を目指し、禅寺との直接的関係を形成することとで外交活動の人的基盤とした。一方、防長地域にも博多の禅寺と緊密なネットワークで結ばれた禅寺が存在した。大内氏の徴用した禅宗勢力は、室町政権と密接な夢窓派ではなく、聖一派・大応派・大覚派・幻住派などのいわゆる「博多禅」構成門派であった。これらの門派ネットワークは、瀬戸

内海の港町や京都五山とも強固に結び付くのみならず、内部に多くの貿易商人を抱えていたため、大内氏の外交活動を支える存在として申し分なかった「伊藤幸司 2002a・第二部」。

また、室町政権が「外交機関としての五山」の中核として相国寺の鹿苑僧録や蔭涼職を位置付けたように、大内氏の下にも「大内氏の外交機関」ともいえる保寿寺という禅寺が本拠地山口にあった。保寿寺（現在廃寺）は、大内一族によって創建され、歴代住持は大内一族の禅僧が就任する大内氏の菩提寺（大内教祐）の一つである。大内氏の私寺ではあるものの、歴代住持は京都五山で修行しており、その個人的人脈から同寺は中央と地方を跨ぐ広範なネットワークを有していた。同時に、保寿寺は外交僧の育成機関の意味合いもあった。特に、第二世住持以参周省は、癡鈍妙頼（大内師弘の子・夢窓派寿章門派）の法を嗣ぎ、京都相国寺で修行しつつも、一時俗縁の叔父である勝剛・長柔から外学を学ぶために東福寺にも掛搭し、さらに永平下曹洞宗の密参をも受けた人物で、京都五山とのパイプも太く、大内政弘・義興父子から深く帰依された。彼が、大内氏から朝鮮国宛ての外交文書を作成していることからすると、保寿寺住持の職掌の一つに外交文書の起草があつたのであろう。大内氏は独自に朝鮮・琉球通交を展開していたため、自ら外交文書を用意する必要があつたが、その役割は保寿寺のような領国内の禅僧のみならず、場合によっては京都五山の禅僧を招聘することで解決していた「伊藤幸司 2002a・第二部」。保寿寺に代表される大内氏の菩提寺からは、梅屋宗香（乗福寺・大内弘幸・弘世の

菩提寺)、提点永扶・心月受竺(香積寺)・大内義弘の菩提寺)、法泉寺住持某(3)(大内政弘の菩提寺)のように、大内氏の外交僧が多数輩出されており、菩提寺群も大内氏外交の人的基盤となっていたのである。そのなかにあって、「大内氏の外交機関」ともいえる保寿寺は、大内氏の外交活動において菩提寺群の頂点的位置にあったと思われる。

なお、大内氏の外交を中核で担う禅僧には、以参周省のようには夢窓派・聖一派・曹洞宗など多様な門派を兼修する密参禅をしている者が多く、例えば周防定林寺の春湖清鑑や赤間関永福寺の桂庵玄樹らがいる。彼らは、密参という形態で多様な門派のネットワークを獲得しており、この性格が外交ネットワークの拡大にも繋がっていたものと推察される〔伊藤幸司 2002a・第一部〕。

ここに見る大内氏と外交僧のあり方は、大内氏と同じように独自の外交活動を目論んだ地域権力でも確認することがができる。ここでは、特に九州の大友氏と宗氏の事例を挙げておく(島津氏は第四章で詳述)。大友氏の外交僧で著名なのは、第一次宝徳三年度の遣明使の際、六号船の大友船に乗船した斯立光幢である。彼は京都東福寺の禅僧で、大友親繁によつて豊後勝光寺へ招聘された。大友氏は、鎌倉期から聖一派との密接な関係を形成していたが、特に斯立光幢の所属する聖一派三聖門派が豊後への展開を果たしていた。入明し、寧波の文人との交流を果たした彼は、帰国後、東福寺住持に出世し宝勝庵を開創している。宝勝庵は、彼の弟子筋の拠点となったのと同時に、以後、大友氏や大内氏の外交活動を支

える外交僧を多く輩出した〔伊藤幸司 2002a・第二部第三章 / 2009〕。

対馬宗氏は、その地理的要因から、高麗以来、朝鮮半島と頻繁な通交貿易を行っている。一三九二年、新たに朝鮮王朝が誕生すると、朝鮮は倭寇問題解決のために日本列島の多様な通交者を受け入れる懐柔政策を執った。しかし、増加する倭人たちの接待費用が財政を圧迫するようになったため、世宗期以降、様々な通交統制策を導入することで、渡航者の峻別を行った〔中村栄孝 1995・第一章〕。なかでも、日本側通交者に書契(外交文書)や対馬島主文引(朝鮮渡航証明書)の携帯を義務付ける「書契による統制」や「文引の制」は、日朝通交における宗氏的重要性を決定的にする一方、宗氏に外交文書起草能力を有する人物の確保を促した。さらに、一四四〇年代に対馬島主歳遣船を五〇船に制限する癸亥約条が成立すると、宗氏は縮小した通交権益拡大のために、通交名義を詐称する使節(偽使)を創出することで貿易利潤の確保を目論んだ。宗氏の偽使創出活動は、日本国王や有力地域権力の通交名義のみならず、架空人物の名義をも騙る組織的で大規模なものであった〔長節子 2002a・第二部 / 2002b〕〔橋本雄 2005〕〔伊藤幸司 2005〕〔荒木和憲 2007〕。それ故、故実や修辭技術を駆使する本格的な外交文書の起草(改竄や偽造も含む)能力と、偽使を朝鮮側に露見させないための外交折衝能力を持ち、かつ朝鮮通交を熟知する外交僧の確保が不可欠となった。このため、一五世紀中葉、宗氏は日本国王使の副使として朝鮮に赴いた天龍寺の仰之梵高(夢窓派

華蔵門派^{けざうもんぱ}を対馬に招聘し、外交文書の起草に従事させた。彼の招聘によって、宗氏は高度な漢文起草能力と京都五山に通じる窓口を確保したのである〔橋本雄 2005・第一章〕〔伊藤幸司 2002a・第一部第二章／2002b〕。

応仁・文明の乱後、長年敵対関係にあった宗氏と大内氏の間で軍事的和睦が成立すると、大内領国を含む玄界灘地域の外交僧が宗氏の外交活動（偽使派遣活動）を支えるようになる。宗氏の外交僧にも、臨濟宗と曹洞宗の二重僧籍者の性格を有する対馬国分寺の景林宗鎮^{けいりんそうちん}のように、大内氏の外交僧の特徴を合わせ持つ者や、博多とのつながりを有する者が確認できるようになる。宗氏は、博多を支配する大内氏との関係改善によって、博多商人の貿易資本や市場のみならず、外交僧という人的基盤をも確保することに成功したのである〔伊藤幸司 2002b〕。

一五世紀末期、京都で明応の政変が勃発し、室町政権の將軍権力が〔足利義種—義維〕系と〔足利義澄—義晴〕系に分裂した。この結果、室町殿が一元的に掌握していた外交符驗（外交資格証明手段としての日明勘合と日朝牙符）も、両陣営によって自身の求心力確保の目的で九州地域の地域権力にばらまかれ、中世後期における日本の国際関係の主軸が〔幕府外交〕から〔地域交流〕へと転回した〔橋本雄 2005・第五章〕。このことは同時に、「外交機関としての五山」が実態としては事実上解体に向かい、博多周辺の禪宗勢力が外交のイニシアティブを握るという情況をもたらした。特に、遣明船に強い影響力を及ぼした大内氏や、偽使通交によって朝鮮

通交権を集約しつつあった宗氏らが、博多聖福寺を拠点に展開していた臨濟宗幻住派を外交僧として起用した結果、同派が一六世紀の外交を担う主力となった〔長正統 1963〕〔伊藤幸司 2002a・第三部第二章〕〔橋本雄 2005・第五章〕。幻住派は、丹波高源寺を本寺とする一派であるが〔玉村竹一 1979〕〔橋本雄 1999／2000a〕、南北朝期には既に博多聖福寺でも受容されていた。一六世紀の日本禪宗界では、従来の門派の枠組みを超える密參禪が隆盛化し、そのなかにあつて幻住派は従来の門派ネットワークを再編する特徴を備えていた〔川本慎自 2003〕。大内氏が経営した第一八次天文七年度の遣明船正使湖心碩鼎^{こくしんたいてい}や、対馬の外交機関ともいえる以酢庵^{いそあん}の開祖で朝鮮通交を担った景轍玄蘇^{けいさくげんそ}は、いずれも博多聖福寺ゆかりの幻住派禪僧であり、入明記『初渡集』『再渡集』を著した天龍寺妙智院^{てんりゅうじめうちゐん}の策彦周良^{さくへんしゅうりやう}（夢窓派華蔵門派）も同派周辺で活躍する外交僧であつた〔伊藤幸司 2002a・第二部第一章〕。

【中国・朝鮮・日本の外交使節のあり方】

* 琉球に関しては第四章参照

国名	交渉相手	使者のあり方
元	日本	官人↓禪僧
明	日本↓室町政権	官人↓禪僧+天台僧↓官人
高麗	日本	官人
	元	官人
朝鮮	明	官人
	室町政権	僧侶↓官人
	九州探題・大内氏等	官人

日本 (室町政権)	明	官人(受職人も含む)
(大内氏)	朝鮮	禅僧+天台僧↓禅僧
(対馬宗氏)	朝鮮	禅僧
	朝鮮	俗人・禅僧

三 外交僧の役割

一四世紀後半以降、東アジア世界の地域交流は国家間外交、もしくは国家を交渉相手とする交流が主流となる。この形態の交流は、それまでの民間交流とは異なり、外交文書を携帯し、外交儀礼や高度な外交折衝を遂行する必要があった。

1 外交文書の起草

外交文書は、外交上、不可欠なアイテムであり、その起草には一定度の知識と技術を必要とした。

〔遣明表の作成〕足利義満の冊封以前の段階では、公家が対明通交の国書を起草していた。しかし、一四〇二年に義満が日本国王に冊封されて以後は、京都五山系の禅僧を外交文書の起草者に位置付けた。それまでの対明国書は、明皇帝に臣従し献上する形式である表文で書かれることはなかったが、冊封を受けた以上は「日本国王」号を使用した表文形式の国書(遣明表)を携行する必要があった。伝統的対外観や

神国思想を強く抱く公家がそのような遣明表を起草することはありません、その意味でも明との密接な関係を有する夢窓派を中心とする京都五山系禅僧の出番であった〔橋本雄 1989/2006〕。室町政権は、既に高麗・朝鮮宛ての外交文書を春屋妙葩らに起草させており、ここに日明・日朝外交文書を司る「外交機関としての五山」が整ったことになる。

遣明表の起草は、鹿苑僧録の経験者が多いものの、必ずしも僧録の職掌という訳ではなく、五山の学統や個人の能力によって起草者が決定された〔田中博美 1986〕。特に、遣明表は四六駢儷文を駆使した文体で起草することが求められていたため、明初に季潭宗泐から蒲室疏法を伝授された絶海中津の学統〔玉村竹二 1986〕が起草者になっていた〔橋本雄 1987〕。遣明表では、日本国王たる室町殿の名前の上に明から下賜された「日本国王之印」の金印を捺す。金印は、日明勘合と共に公方御倉に保管され、使用に際しては蔭涼軒主が室町殿の面前で行い、室町殿の封を必要とした〔田中健夫 1988・第一部第三章〕。

〔書契の作成〕日朝間で取り交わされる外交文書を書契という。書契は、私的な漢文書簡の流れをひく公的な外交文書である。書契は、文字の大きさ・書き出し位置・平出・摺頭・紙厚などで発給者と受給者の微妙な関係を可視化するアイテムでもあり〔伊藤幸司 2002〕〔米谷均 2002〕。書契作成者はこの点を勘案する必要があった。

室町政権では、僧録の肩書きを有した春屋妙葩が高麗への返書を作成して以後、遣朝鮮国書の作成権は鹿苑僧録にあった。

たが、文正年間以降は蔭涼職にその職掌が移動した。遣明表のように特殊な文体ではなく、単なる書簡型文書であった遣朝鮮国書は、起草僧の選定も比較的こだわりのなかったが、清書は能筆の僧に行わせていた。国書に捺される「徳有郷」印は、蔭涼軒御倉に保管され、蔭涼職自身かその会下の僧が捺印をした。遣朝鮮国書の作成は、遣明表と比較すると扱い方が低かった〔橋本雄 1997〕。

一方、大内氏は、「大内氏の外交換関」ともいえる山口の保寿寺住持以参周省や、京都五山から周防に下向して来た文筆僧（岐陽方秀・梅屋宗春）らに書契の作成を委ねていた〔伊藤幸司 2002a・第二部第三章〕。宗氏は、京都五山系の仰之梵高を招聘した以外にも、明人秦盛幸を起用して文引・書契の作成を任せていたが、博多を掌握する大内氏との関係が改善された後は、博多の禅宗勢力（幻住派禅僧）を積極的に活用した〔伊藤幸司 2002b〕。

〔外交換書の偽造と改竄〕一四世紀末期～一七世紀前期における日本の外交は、偽使の時代でもあった。特に、日朝通交の場では、多くの書契が偽使派遣勢力（対馬・博多勢力が主導）によって改竄されたり偽造された。それは、日本国王の国書であろうと琉球国王の国書であろうと例外ではなかった。書契の改竄・偽造の遂行に際しては、外交文書に関する専門的知識が不可欠であり、その行為は博多や対馬の外交換によって支えられていた〔田代和生・米谷均 1995〕〔米谷均 1997〕〔橋本雄 2005〕〔伊藤幸司 2005〕。

一方、厳格に準備・管理される遣明表の偽造や改竄は稀で

あり、大内氏が経営を独占し、事実上最後の正式な遣明船となった第一九次天文一六年度の遣明使の時に、大内氏が偽造したことが分かっている。この時、正使に任命された策彦周良が、遣明表や別幅（べつぷく）（朝貢品リスト）の作成方法について「天文十二年後渡唐方進貢物諸色注文」（妙智院所蔵）〔伊藤幸司 2006〕という史料のなかで触れている。これに拠ると、「日本国王之印」の「在所」は口伝となっており、遣明表への捺印は山口の大内館で保寿寺住持彦明梵良（大内政弘の子、以参周省の弟子）が行った〔伊藤幸司 2002a・第二部第一章〕。この時に使用された「日本国王之印」は偽造印であり、現在毛利博物館に所蔵される木印がそれに相当すると推測されている〔橋本雄 1996a〕。

〔外交故実の集積〕国家外交を安定的に遂行するためには、新たな秩序に基づいた外交故実を集積し、知識と技術の継承を図る必要がある。そして、このような動きは当事者たる外交僧のなかから発せられた。第一二次応仁度の遣明使の遣明表を起草した瑞溪周鳳は、自己の経験を元にして、外交の先例・旧規を調査し、後進に示す指南書を遺す目的で日本初の外交文書集『善隣国宝記』を編纂した〔田中健夫 1995・第六章／1995〕。以後、江戸期以降も外交文書作成の担当者によって『江雲隨筆』・『異国日記』（南禅寺金地院の以心崇伝）・『本邦朝鮮往復書簡』・『続善隣国宝記』に代表される指南書や参考書、文書集が多く作られているのは、京都五山系の外交僧のなかに先例を書き留めて後世に伝えようとする明瞭な意識があったことを示している〔田中健夫 1996・

第七／「一章」。

遣明使として渡海した外交僧のなかには、入明記を残した者もいる。入明記には、『入唐記』（第一次遣明船従僧笑雲瑞訥）・『戊子入明記』・『壬申入明記』・『初渡集』（第一次遣明船副使策彦周良）・『再渡集』（第一次遣明船正使策彦周良）の五種類がある。このうち、『戊子入明記』は第九／一二次遣明使『伊川健二2007・第二部第一章』、『壬申入明記』は第一次遣明使の關係史料を収載している。内容は、進貢品・輸出品リスト、搭乗員リスト、外交折衝過程で発給した文書写など多岐にわたっている。一方、『入唐記』〔伊藤幸司2006〕・『初渡集』・『再渡集』（4）〔牧田諦亮1965〕は、外交使節の目から記された渡海日記である。これらは単なる日記ではなく、明における外交交渉過程やそれに付随する往復書簡の写し、日本の禅僧が憧れる寧波・北京間の名利・名所などが的確に記されており、その後の遣明使が参照すべきものであった。瑞溪周鳳が『善隣国宝記』の附録として『入唐記』を所載しようと考えたことは〔田中健夫1965〕、入明記に外交故実書としての意味合いがあったことを証明している。特に、二度の入明を果たした策彦周良は、遣明使關係の史料収集を精力的に行っており、現在、その多くが天龍寺妙智院に伝来している〔牧田諦亮1965／1969〕〔伊川健二2004〕。また、表現の仕方は異なるものの、雪舟等楊が入明時に描いたとされる『唐土勝景圖巻』や『国々人物図』もヴィジュアル版入明記のようなものであり、故実的意味合いが少なからずあったものと考えられる〔島尾新

2008〕。

2 異国へ渡る外交僧

実際に異国へ渡海し外交折衝を行う外交僧は、五山禅宗界において外交文書起草者より一段低いランクに属する禅僧と考えられている〔村井章介1988・第二章〕。外交使節としての外交僧の役職には、遣明使の場合、正使・副使・綱司・居座・土官・従僧がある。このうち、綱司・居座・土官は貿易業務を司る官職で〔小葉田淳1976・第五章〕、綱司・居座は禅僧が、土官は俗人が任命される場合が多いものの、桂庵玄樹のように禅僧が土官に就任する場合もあった。綱司は常設ではなく、臨時的な官職の可能性が高い。一方、朝鮮へ派遣される使節は、禅僧であれ俗人であれ正官人・副官人と呼ばれる。

遣明使の選任は、一般的に蔭涼職が官員の候補者リストを將軍に奏上し、將軍から承認をもらうことで決定した〔湯谷稔1984〕〔橋本雄1997〕。候補者には、渡海経験者や、日明勘合を獲得し遣明船の運営を任された経営者から推薦された者などが名を連ねた。遣明使の首脳部は、出発前に將軍に暇乞いし、帰国後は正使が報告を行った（第一次遣明使は大内義隆に対して行っている）。また、重要な朝貢・貿易品としての硫黄調達のために、室町政権は禅僧を硫黄使節として任命し島津領国へ派遣している〔小葉田淳1976・第七章〕。一方、朝鮮への使節選任は、室町政権の場合は特に規則はなかった。日本国王使の多くは、特定神社の大藏經求請目的で

渡海することが多く、国王使の運営許可さえ獲得すれば、使節の経営は請経主体の寺社側が独自に行っていたからである〔橋本雄 1997〕。また、大内氏や宗氏などが派遣する使節の選任については、関係史料が少なく詳細は不明であるが、大蔵経求請を目的とする使節の場合には、寺社側の要請に基づき当該寺社の関係僧侶等が渡海することが多かったようである〔中村栄孝 1965・第十七章〕。遣明使と遣朝鮮使の違いには、形式上、遣明船正使に五山出世者（坐公文含む）が就いたのに対し、遣朝鮮使にはそのような先例がなかった。

なお、遣明使のなかには、明朝の官職や明朝禅宗界の地位を獲得して帰国する者もいた。こうした職位は名目的ではあるが、日本禅林において一定度のステータスとして認知されていたようで、大陸への憧憬を抱き続ける禅僧の内面を窺うことができる〔伊藤幸司 2010〕。

遣明使や遣朝鮮使の派遣が継続して行われるようになると、渡海外交僧のなかには何度も使節に選任され、外交経験豊富な専門的外交僧もいえる禅僧が登場するようになる。例えば、堅中圭密（仏光派）は第二次・第五次・第六次・第八次遣明使の正使を勤め、肅元寿藏（夢窓派靈松門派）は第一次遣明船正使の東洋允澎の弟子で從僧として入明後、第一次遣明使居座・第一次遣明使從僧・第一次遣明使居座として四回の入明を果たした。実践的な外交経験を積んだ彼は、帰国後、蔭涼職の亀泉集証から日明勘合の先例について尋ねられることもあった（『蔭涼軒日録』長享元年（一〇月二十九日条）。このような事例は他にもあり、肅元寿藏と同じく

第一次遣明使居座として入明した東帰光松（聖一派三聖門派）が鹿苑僧録景徐周麟から遣明船の安運について問われ、詳細な返答をしている（『鹿苑日録』明応八年八月六日条）。

貿易実務を担う居座には、禅寺を経営的側面から支えた東班僧がその経済的手腕を請われて選任されることも多い。例えば、妙増都聞（夢窓派華嚴門派）は永享年間の第九次が第一次・第一次・第一次遣明使の居座に就き〔上村観光 1993〕〔伊藤幸司 2002a・第一部第二章〕、博多で貿易物資調達に勤しみ、幕府船や天龍寺船の要人として活躍した。しかし、西班僧（おもに宗旨修行的側面を担当）でも経済的手腕に優れば東班僧並みの活躍をする者はおろ、取龍首座（聖一派）は文明年間の第一次・第一次遣明使の居座として乗船し、特に後者の遣明船では堺商人と結託し、事実上の経営者として遣明船史上唯一となる内裏船を運営した〔伊藤幸司 2002a・第一部第一章〕。

朝鮮通交の場でも、例えば梵齡は日本国王使として四度渡海し、芸文提学尹淮からその功績をたたえる跋文を詩巻に貰う外交僧であったが、最後は富山浦（釜山浦）で死去した（『世宗実録』七年五月戊寅条・同庚辰条、一五年五月辛酉条）。大内氏の外交僧では、通竺なる禅僧が一九六・一三九七年に、徳模なる禅僧が一四四三・一四四六・一四五七年に大内殿使として朝鮮に渡海している。

外交僧のなかには、博多妙楽寺ゆかりの博多商人宗金のような者もいる。彼は、僧俗の不明瞭な僧侶の貿易商人（＝僧侶的商人、禅商）で、臨済宗大応派に属する禅僧と推測され

る「上田純一 2000・第二章第二節」〔伊藤幸司 2002a・第一部第三章〕。宗金は、使送倭人・受國書人として独自に朝鮮通交貿易を行うのみならず、一四二九年には日本国王使として朝鮮へ渡海し、第九次永享四年度の遣明使として入明した〔佐伯弘次 1999〕。彼の末子の性春（おそらく禅僧）も第一次応仁度の遣明使の土官として入明し、一四七五年には日本国王使として朝鮮へ渡っている〔有光保茂 1997〕。一方、文溪正祐は一四二九年来九州探題渡川氏の使者として朝鮮に渡海した後、再度渡海、永享年間には遣明船に乗船して入明し〔伊藤幸司 2002〕、一四四八年には日本国王使として朝鮮へ再々渡航した〔村井章介 1985・第四章〕。このように、博多周辺には二国間に跨って活動する外交僧があり、当該地域が実践経験豊かな外交僧の宝庫であることが分かる。それ故、大内氏や宗氏も彼らを起用した結果、同一人物が大内氏と宗氏の外交僧になることもあった〔伊藤幸司 2002〕。同じように、室町政権の外交活動も彼ら博多勢力に依存せず遂行することは不可能であった。しかし、室町政権のこうした外交態勢こそ、幕府の外交面におけるイニシアティブの限界性を示しており、朝鮮通交において偽使創作を可能たらしめる歴史的・構造的背景となっていた〔伊藤幸司 2002a・第一部第三章〕（5）。

3 異国における折衝

外交僧の資質が最も問われるのは、異国での外交折衝の場である。外交折衝では、自らの要求を実現するために様々な

手法を用いる。時には、寧波の乱のように暴力に訴えることや、ハンガー・ストライキをすることで要求を無理強いしよう〔村井章介 1985・第三章第一章〕と試みることもあった。しかし、多くの場合は短疏（短書）や漢詩文を通じて意思の疎通が行われた。特に、短疏とは外交文書とは異なる略式に作製された漢文文書であり、一種の陳情書的性格を帯びていた〔米谷均 1998〕。

例えば、一四二三年に朝鮮へ渡航した源省（田平省）の正使秀嶺の交渉を挙げてみよう。

源省正使釈秀嶺、在館呈書于礼曹曰、「前日、差使員、以執事之命、三品其疏黄、来曰、『比乎此、而居其上中者蔵之、其下者除之』、今源公所員疏黄、亦雖有上中下三品、既及数千觔、故暫置之於富山浦、以俟聞執事之命矣、僕竊以源公畏大國之威、不遑寧處、登議宵思、願欲忠大國、故不遠万里之重溟、奉不腆土貢、以表其至誠、大國、以貢物不精、不受之、則絶下邑之好也、僕聞之、昔齊桓伐楚、問包茅之不貢、但責其貢不納、而不論貢之精麁、楚大國也、豈無善於包茅者、蓋尚其貢而已矣、下邑之疏黄、既是楚國之包茅也、伏冀悉納、以為下國之貢、幸甚」〔《世宗実録》五年六月庚午条〕

右の史料は、秀嶺らが持ち込んだ疏黄について、朝鮮側がその品質を上中下の三段階に区分けし、質の悪い「下」の疏黄は要らない旨を言ったところ、秀嶺は、源省が如何に朝鮮を大國として敬い忠節を尽くしたいと願っているかということを主張することで朝鮮側の歎心を誘い、さらに「昔、齊の

桓楚を伐ち、包茅の貢がざるを問う」という『史記』齊太公世家条にある故実を持ち出して、朝鮮側の不当性を追求している。外交僧秀嶺の巧みな交渉術が短疏を通じて展開されていることが分かる。

遣明使の場合でも、例えば第一六次遣明船正使であつた了庵桂悟が、刀剣の収買、上京人数五〇人の制限、下賜衣裳など明側の対応がすべて旧例に違っていることを次の短疏で礼部に訴えている「小葉田淳」(同・第七章)。なお、この短疏は三号船居座鸛岡省佐が起草したことが分かっている。彼は、朝廷で『文選』を講ずる程の学僧であつた「玉村竹二」(1983)。この時の遣明使が明側との交渉で提出した大量の短疏の写しは『壬申入明記』に収載されており、詳細な貿易折衝の様子が分かる。

日本国差来正使桂悟等、謹

呈為朝

貢事、悟等、昔者在

貴治所、訴失旧規事附搭大刀以下、能令

浙江諸大人奏達

聖聽者、

老爹之恩致也、碎身粉身、豈勝謝哉、又曾所告使臣人

等衣裳單而無裡、又正・副使袈裟金環、改作鍍金、

是變旧例、乞達

京師以復旧例、已蒙

全諾、爾來未聞返命、且夕翹仰、此非悟等貪小利、只

恐失旧例、愛國王之責、伏願、早賜示談、則頂戴無

極也、謹

呈、

正徳七年九月

日

正使

桂悟

副使

居座

土官

通事

礼部老爹 台座下

また、第一八次遣明船副使の策彦周良は、寧波での滞在中に次のような短疏を提出している(『初渡集』嘉靖一八年六月一五日条)。

日本国差来正使碩鼎等、謹

呈進

貢物件、纓蒙盤驗、收在官庫、邇來積雨陰々、一日靡有

快晴、是故、弗遑解包而曝焉、只恐蒸濕交加、外爛内

損、是可忍也、抑生等、淹屈海洋久矣、頃者、雖偶処

館裡、門吏、緊嚴、不許容易往還、終日惘然、頗似有

病者、不遊名区、不入勝境、何以忘羈旅之勞、可不憐

懷乎、且復生等、上

京起身、未有期日、々待

朝廷寬恤之詔、瞻企之甚、如大旱望雲霓、若弁裝遲延、

則明年歸國、必失順風節、前來朝

貢使臣、或

詔除不降、或愁訴不決、徒費日月於

上國、如此之例、比々焉有之、生等、今不累累、噬臍何

及、往昔以来、

鎮府之於日人等、猶如父母、々々豈無紙牘之愛乎、伏
希、

老公々与列位、共議、速蒙許諾、茲聞、
公々、近日回帰焼於 杭州、然則他時異日、生等、憑誰

開告訴之口哉、故稟白、
嘉靖十八年六月 日

正使碩鼎
副使周良

居座梵琢

居座等越

土官正頼

土官増重

通事呉栄

鎮守老公々 台前

この時、策彦周良ら一行は、寧波の乱後に入明した日本人と
いうことで明から著しい警戒を受け、湿気が多い嘉賓館とい
う接待所に閉じ込められ、自由な外出もできないまま、北京
への上京許可が降りるのを待たされていた。しかし、余りの
劣悪な環境により、病人が続出し死人も出る有様であったた
め、彼は待遇の改善と早急な上京許可を陳情した。その際、
上京の許可が遅延すれば、帰国の航海に不可欠な順風の季節
を逃してしまう旨を強調している。ここに見る「明年帰国、
必失順風節」の類のフレーズは、日本の遣明使が明側との交
渉事を促進させたい時に使う常套句であり、遣明使の短疏に
は類似の文言が頻出する。この事は、短疏を作成する外交僧

が、交渉時に有効な短疏の言い回しを知識として把握してい
たことを明示する。また、日記に控えられる短疏が平出や塩
頭箇所を忠実に復原しているのも、より正確な故実の蓄積を
目的としていたからだと推測される。そして、その具体的
な蓄積の結果が、各種入明記であったのである。

外交僧は、当然ながら貿易物品以外の文物の移入にも携
わっていた。特に、書籍の輸入に関わる彼らは、室町期日本
の知性を担っていたともいえる「國原美佐子 2003」。明代に
成立した『医書大全』のような貴重書が、早くも文明年間の
堺で確認できるのは（『蔗軒日録』文明一六年四月七日条）、
彼らに拠る所が大きい。一方、策彦周良のように禪僧であり
ながら仏書よりも類書や詩文集の入手に努力する外交僧も多
く、その興味は多岐に渡っていた。遣明使が帰国すると、外
交僧を通じて唐墨や唐筆など小物の唐物が巷に出回った。こ
れらのなかには、彼らが寧波などで買求めた以外に、大陸
の士大夫（例えば寧波の文人）と親密な交流（『海老根聰郎
1976』）をして贈答されたものもあった。

四 琉球王国と中世日本

中世日本からみて異国であった琉球では、三人の王が存在
する三山時代を経て、一五世紀前半に中山王が三山を統一し
琉球王国が成立する。琉球は、明朝成立間もない頃から朝貢
関係を形成するのみならず、明から大型海船を賜与された上
に人的な支援・優遇を受け、明の海禁政策が施行された東ア
ジア海域の諸地域を結ぶ中継貿易で繁栄した。この東アジア

を跨ぐ広範な通交貿易活動を支えたのが、いわゆる閩人三十六姓と呼ばれた久米村の在琉華人である。彼らは、福建地域の出身者が琉球の朝貢活動を支援するために明から派遣されたという伝承を持ち、彼らの居留する久米村は那覇港の一角にあつた。彼らの役割には、外交文書の作成、通事、外交官として渡海することのほか、進貢船の船長（火長）や水夫などがある。当該期の東南アジアの港市国家には、久米村人のような在留華人が点在しており、琉球王国の中継貿易はこれら華人ネットワークを最大限に活用して行われた。琉球王国の外交機関ともいえる久米村では、『歴代宝案』と呼ばれる外交文書集も作られており、外交故実の蓄積も為されていた【高良倉吉1998】。

ところで、『海東諸国紀』『琉球国図』の那覇の説明で「江南・南蛮・日本の商船の泊まる所」とあるように、琉球王国は日本とも通交関係を持っていた。しかし、『歴代宝案』には日本関係の文書が全く収載されておらず、久米村の在琉華人は対日外交には携わっていなかった。琉球王国の対日外交を司っていたのは禅僧である。琉球への本格的な禅宗の流入は、一五世紀中葉の京都南禅寺語心院の徒芥隠承琉の渡琉から始まる。彼は、琉球国王の篤い帰依を獲得し、天界寺や天王寺など多くの禅寺を開創した。そして、一五世紀末期、首里城に隣接する地に尚王家の菩提寺で琉球最高位を誇る円覚寺が成立し、住持が琉球禅僧を統制管理する僧録を司る頃には、琉球禅林と呼ぶに相応しい様相が整った【葉貫磨哉1983・第五章第三節】。琉球で仏教興隆が図られ、特に小型

の禅寺が多く作られた背景には、対日外交を司る外交僧確保の意味合いもあった【知名定寛2007】。日本人鑄物師が製作した和鐘を装備する琉球の禅寺は、琉球王国のなかで「ヤマト」的なモノを示す装置でもあつた。琉球へは多くの日本僧が渡琉し、同時に多くの琉球僧が日本に参学するなど、日琉禅林相互の交流が活発に行われていた【小葉田淳1983】【葉貫磨哉1983・第五章第三節】【村井章介1986・第五章】【伊藤幸司2002a・第三部第一章】。那覇には、日本から渡琉してきた禅僧をはじめとする日本人たちが居住し、日本の宗教施設が立ち並ぶ倭人居留地も形成されていた【上里隆史2006】。

琉球王国では、琉球僧録（当初は天王寺住持、後に円覚寺住持【伊藤幸司2002a・第三部第一章】）が外交担当部局の性格を有していた【村井章介1986・第五章】。琉球王国から日本へ発給される外交文書は、基本的に和様漢文や仮名が使用された日本の中世文書の文体であり【佐伯弘次1984】、その作成に当たっていたのが琉球僧録や琉球王府に登用された日本人であつた。日本への外交使節（琉球国王使）には、芥隠承琉（一四六六年・足利義政）、天王寺住持檀溪全義（一五二六年・足利義晴）、建善寺月泉和尚（一五五六年・島津忠良・貴久）、【旧記雜録】後編卷一・附録一卷一〇、天界寺修翁和尚（一五七七年・島津義久）、【旧記雜録】後編卷九、天龍寺住持桃庵祖昌（一五八九年・豊臣秀吉）、西来院菊隠宗意（一六〇九年・徳川家康【伊藤幸司2002a・第三部第一章】）など琉球禅林の禅僧が起用されているが、彼らの

多くは日本からの渡琉僧（芥隠・元京都五山系禪僧、檀溪・薩摩出身）か、京都・堺などの日本禅林に参学（菊隠・大徳寺北派に歴参）した経験をもっていた。琉球の使節には、日本から渡琉し琉球側で雇用されていた通事（禪僧や俗人）も存在し、琉球語を島津氏側の重臣に通訳する場合や「上里隆史2006」、時には「和言」「倭俗」に通じているという理由でメンバーに抜擢される者もいた（伊藤幸司2002a・第三部第一章）。

一方、室町政権における琉球王国への対応は、「外交機関としての五山」の役割という訳ではなかった。

従琉球国書云

畏言上

毎年為御札令啓上候間、如形奉捧折紙候、隨而去年進上仕候両船、未下向候之間、無御心元存候、以上意目出度帰島仕候者、所仰候、諸事御奉行所へ申入候、定可有言上候、誠恐誠惶敬白、

応永廿七年五月六日 代主印

進上 御奉行所 十月到来

この文書は、室町政権（足利義持）に対する琉球国王使が携えた琉球代主国書である（6）。宛所が御奉行所となつてゐることが注目される。室町政権は、琉球国王に対して日本国内で使用される御内書様式の仮名書き文書に、日本年号と「徳有鄰」印を捺したものを発給していた。「なかば外国であり、なかば家臣である」という曖昧かつ親近の態度（田中健夫1983・第一部第四章）であつたため、文書様式も通明表

や遣朝鮮国書とは著しく異なつた。そして、瑞溪周鳳の編纂した『善隣国宝記』に琉球国王宛て文書が一切収載されていないことなどを鑑みれば、室町政権は琉球外交を禪僧に委ねておらず、基本的に「外交機関としての五山」の管轄外であつたと推測する。一五〇九年、室町政権（足利義植）が琉球王国に接触を試みようとした際、義植政権を支える公家阿野季綱は五山系の禪僧ではなく公家衆の重鎮三条西実隆に「琉球国事書状之礼等」を尋ねている（『実隆公記』永正六年四月二十八日条）。この点からも、室町政権の琉球外交における文書起草は禪僧の専権事項でなかつたことが明らかである。また、室町政権は琉球王国に直接使節を派遣することはなく、来日する琉球国王使や薩摩島津氏を介しての接触であつた。ここに、室町政権が明や朝鮮とは異なる視線で琉球王国を見ていたことが分かる。

しかし、室町政権とは異なり琉球王国と直接通交を行つてゐた大内氏や島津氏は領国内の禪僧を外交僧として起用してゐた。大内氏の場合、例えば徳雲軒源松なる外交僧が琉球渡海するのみならず、天界寺を琉球における窓口的役割に位置付け、同寺を通じて外交折衝を展開してゐた。天界寺を琉球の窓口とする勢力には、大内氏と密接な島津豊州家もいた（伊藤幸司2003）。一方、島津氏における外交僧の具体的な活躍は、島津忠昌による桂庵玄樹の招聘を画期とする。桂庵玄樹は、朱子学の一学派である薩南学派の祖として著名であるが、同時に当該期における第一級の外交僧でもあつた。赤間関出身の彼は、京都五山で修行した後、聖一派龍吟門派僧

として赤間関永福寺に住していたが、第一二次応仁度の遣明使で大内船（三号船）土官として拔擢された。彼の任務は、大内船の最高責任者として大内氏の貿易活動を円滑に行うことにあつた。大内船は、往路の呼子浦で悪風に遭遇して積荷の流出被害が出たものの、桂庵玄樹はこれを理由として明に賜物加増要求という外交折衝を展開し、銅錢五〇〇貫を獲得している〔小葉田淳 1941・第三章〕。この時の大内船には、水墨画で有名な雪舟等楊も乗船していた。桂庵は帰国後、雪舟と同様、九州地域を遍歴したが、それを島津忠昌（島津奥州家）が薩摩に招聘した。招聘の背後には、優秀な学僧を招いて当地での宋学の隆盛を図るという文化的側面以上に、島津氏の対琉球政策が関係していたと考えられる〔伊藤幸司 2002a・第二部第三章〕。当該期、島津氏は室町政権―琉球間の仲介者として、また南九州の支配者として琉球との外交関係の緊密化を必要とするようになっていた〔荒木和憲 2006〕。島津氏は、大内氏の外交活動を担い、外交文書起草に不可欠な宋学の知識に精通する桂庵玄樹を迎えることで、対琉球交渉に必要な実践的外交知識の獲得を試みたのである。彼は延徳年間には、日向の島津忠廉（島津豊州家）にも招聘されている。豊州家は独自に琉球との関係を形成するなかで、大内氏の琉球通交や遣明船派遣活動も補佐していた。この両者結び付けていたのが、桂庵玄樹でありその弟子である外交僧月渚英乗であつた〔伊藤幸司 2003〕。

以後、南九州地域では桂庵玄樹の弟子筋から外交を担う人材が輩出されることで、外交僧の人的供給拠点として成長し

た。その代表が、雪岑津興（公光派）であり、桂庵玄樹の四世孫文之玄昌である。雪岑津興は、島津氏重臣町田一族で伊集院広濟寺住持の時に使僧として琉球へ渡海するのみならず〔村井章介 1995・第五章〕〔伊藤幸司 2002a・第三部第一章〕、カンボジア国王宛の外交文書も起草している〔鹿毛敏夫 2008〕。俗弟に京都大徳寺の蘭叔宗秀がいるので、彼は京都との人脈も有していた〔伊藤幸司 2002a・第三部第一章〕。文之玄昌も島津氏の外交ブレンとして、明・琉球・東南アジア諸国に対して発給した外交文書を起草していることが、その詩文集『南浦文集』から分かる。その他、島津氏は大隅安国寺住持雪庭西堂（一五〇八年、『旧記雑録』前編卷四二）、楞嚴寺住持茂林秀繁（一五六五年以後、『旧記雑録』附録二卷三）等を使節として琉球へ派遣していることが確認できる。琉球の外交僧には、島津領国出身の者や法系的に島津氏の外交僧と繋がる者もあり、薩琉関係は海を越えた禅宗ネットワークを介して行われていた〔村井章介 1995・第五章〕。

【琉球王国をめぐる外交使節のあり方】

琉球	国名	交渉相手	使者のあり方
	明	高麗	官人
	朝鮮	南蛮諸国	官人
	室町政権		官人、博多商人への委託
	大内氏		官人、禅僧
			?

明	島津氏	官人 ○ 禅僧
高麗	琉球	?
朝鮮	琉球	官人 ○ 倭人への委託
南蛮諸国	琉球	官人 ○ 琉球国王使に委託
日本 (室町政権) (大内氏) (島津氏)	琉球 琉球 琉球	琉球国王使や島津氏に委託 禅僧 禅僧

おわりに — 「外交と禅僧」の終焉 —

室町政権が崩壊し、戦国の動乱のなかから新たに誕生した豊臣秀吉の統一政権は、前代と同様、禅僧を外交活動に活用した。相国寺の鹿苑僧録西笑承兌は、豊臣政権の外交僧として東アジアの異域・異国、南蛮、キリシタン国に対しての外交文書起草に当たった〔北島万次1980・第三章〕。特に、室町政権が禅僧に担当させなかった琉球国王宛ての漢文文書の起草は、豊臣政権が琉球を朝鮮と同等の完全な外国として扱っていたことを明示する〔三鬼清一郎1987〕。また、漢字文化圏外のポルトガル領インド副王に宛てて漢文の外交文書も発給していた〔北島万次1980・第二章〕。ただし、一六世紀の日本では一五世紀末期の明応の政変を契機として外交活動の主軸が九州地域に移動し、博多聖福寺を拠点とする幻住派禅僧が外交活動を主導していた。豊臣政権は、対朝鮮外交

を対馬宗氏、対琉球外交を薩摩島津氏を通じて行っており、基本的に彼らの外交能力がそのまま政権の外交機能を補充していた。ゆえに、豊臣政権の外交僧の多くも九州地域とネットワークを有する者が多く、さきの西笑承兌も幻住派禅僧の一員であった。豊臣政権の外交は、それまで外交活動を行っていた勢力をそのまま取り込む形で展開されたのであり、独自の外交機関を確立した訳ではなかった〔伊藤幸司2002b〕。豊臣政権最大の外交活動は朝鮮侵攻である。その際、多くの外交僧が知識を活かして文書作成、外交折衝、通訳、イデオロギー操作などの諸面から戦争をサポートした〔北島万次1980・第三章〕。そして、対馬宗氏や小西行長の軍に従軍した景輦、文蘇や天荊、毛利軍に従軍した嘯岳鼎虎、吉川軍に従軍した宿禰俊岳、鍋島軍に従軍した是家明琳、小早川軍に従軍した瑞甫慧瓊らの禅僧が活躍しているが、彼らはもともと対馬宗氏の外交僧か、博多聖福寺周辺の幻住派ネットワークに属する禅僧であった。当該期、最先端の朝鮮外交ノウハウは玄界灘地域に集約されていたのであり、朝鮮に出兵した西国大名も彼らを従軍僧として起用したのである〔伊藤幸司2002b〕。

豊臣政権崩壊後、覇権を握った徳川家康も西笑承兌を外交文書起草者として用いている。他にも、閑室玄侏（湖心碩鼎の四世孫・幻住派）や以心崇伝（大覚派）らが起草者として確認できるが、注目すべきは家康が新たに儒者の藤原惺窩や林羅山らも起草者として登用したことである。以後、家光の時代まで徳川政権の外交文書起草者は禅僧と儒者が併用され

て活躍することになるが、一六三三年に以心崇伝が死去すると、以後の外交文書起草は儒者の手に委ねられていくことになった〔田中健夫1996・第三章〕。

一方、豊臣政権に引き続き徳川政権からも朝鮮通交の役割を任された対馬宗氏は、朝鮮侵攻後の混乱から日朝国交復活を成し遂げることに成功した。その外交折衝を支えたのは、対馬に酩庵の外交僧（景轍玄蘇・規伯玄方^{きくくわ}の師弟）であった。彼らは、中世以来、対馬で連綿と蓄積されてきた日朝外交のノウハウ（偽使派遣能力、外交文書改竄・偽造技術など）を駆使することで〔伊藤幸司2002c〕、徳川政権初期の日朝外交を支えたのである。しかし、一六三一年に勃発した柳川一件によって、対馬が密かに行ってきた日朝国書の改竄や偽作の事実が露見したため、徳川政権は日朝通交の正常化を図り、その再発を防止するために、中世以来の系譜を有する対馬独自の外交機関以酩庵の外交僧を排除した〔田代和生1993〕。そして、政権の意思を外交文書や事務折衝に反映させるために、政権が任命した京都五山僧が輪番で以酩庵に赴き、朝鮮通交の外交業務に従事するという以酩庵輪番制度を新たに確立した〔田中健夫1996・第五章〕。発足当初の以酩庵輪番僧は、外交文書起草技術の面できちなさをみせたが〔伊藤幸司2006〕、それまでに蓄積された外交故実を吸収することでその任務を全うし続けた。以後、朝鮮通交の外交業務は、表向きの外交文書を林家、東萊府との折衝や倭館の貿易等の実務を対馬に酩庵の輪番僧や対馬藩お抱えの儒者（真文役・記室）が行うという明確な分掌ができた〔田中健夫

1996・第三章〕。対馬に酩庵輪番僧による外交実務遂行は、明治初期に外務省が日朝外交を接収するまで継続された。

このように、禅僧が外交を担うという中世的な外交体制は徳川政権初期まで継続していたが、「四つの口」に代表される近世的な外交秩序が整備され、儒者のみが外交文書を起草するようになると、禅僧が外交に関わる場面も急速に縮小した。そして、最終的には徳川政権から朝鮮通交を司るという家役を任された対馬藩の対馬口（以酩庵）においてのみ、禅僧が外交を担うという中世的な様相を残したのである。

注

- (1) 長尾美術館旧蔵（「東巖慧安宛て」元庵普寧尺牘」、奈良国立博物館所蔵（「東巖慧安宛て」元庵普寧尺牘」、MOA美術館所蔵（「本寛上人宛て」元庵普寧尺牘」。
- (2) 五島美術館所蔵（「無庵知藏主宛て」西潤子曇尺牘」。
- (3) 寧波の乱を起こした第一七次大永度の遣明使の大内船（正使は謙道宗説）には、周防法泉寺住持も乗船していたが、当地で死去したという（「大徳寺文書別集真珠庵文書」（大日本古文書）七の一〇〇五号）。おそらく、寧波の乱時の争乱に巻き込まれたものと推察される。
- (4) 『再渡集』と密接に関連する故実史料として、第一九次遣明使に対して発給された明側の官文書を収載し

た冊子が現存している「大庭脩 1977」。

- (5) 江戸期の享保年間頃には、京都五山あるいは対馬以
 前庵周辺で、中世期の外交僧の素性を調査した『異国
 使僧小録』が編纂されている【伊藤幸司 2001】。
 (6) 天理大学附属天理図書館所蔵『大鑑記』三（九条家
 旧蔵本）、『ビブリア』（第八〇号、一九八三年）に所
 収【佐伯弘次 1994】。

【引用文献】・五〇音順

網野善彦 1974 『蒙古襲来』 小学館

荒木和憲 2006 「一五・一六世紀の島津氏—琉球関係」『九
 州史学』第一四四号

荒木和憲 2007 『中世対馬宗氏領国と朝鮮』 山川出版社

有光保茂 1987 『博多商人宗金とその家系』『史淵』第一六
 輯

伊川健二 2004 「天龍寺妙智院所蔵の史料調査報告」 村井
 章介代表『平成二二年度〜平成一五年度科学研究費補
 助金（基盤研究（A）（一））研究成果報告書八—一
 七世紀の東アジア地域における人・物・情報の交流—
 海域と港市の形成、民族・地域間の相互認識を中心に
 一』上巻、東京大学大学院人文社会系研究科

伊川健二 2007 『大航海時代の東アジア』 吉川弘文館

伊藤幸司 2001 『異国使僧小録』の研究—近世に編纂され
 た中世外交僧関係未刊史料—『禅学研究』第八〇号

伊藤幸司 2002a 『中世日本の外交と禪宗』 吉川弘文館

伊藤幸司 2002b 「中世後期における対馬宗氏の外交僧」『年
 報朝鮮学』第八号

伊藤幸司 2002c 「現存史料からみた日朝外交文書・書契」
 『九州史学』第一三二号

伊藤幸司 2002d 「中世後期外交使節の旅と寺」 中尾堯編
 『中世の寺院体制と社会』 吉川弘文館

伊藤幸司 2003 「大内氏の琉球通交」『年報中世史研究』第
 二八号

伊藤幸司 2005 「日朝関係における偽使の時代」『日韓歴史
 共同研究報告書』第二分科篇、日韓歴史共同研究委員
 会

伊藤幸司 2006a 「中世日本の港町と禪宗の展開」 歴史学研
 究会編『港町に生きる』 青木書店

伊藤幸司 2006b 「笑雲瑞訥『入唐記』を読む（一）」『市史
 研究ふくおか』創刊号

伊藤幸司 2006c 「妙智院所蔵『天文十二年後渡唐方進貢物
 諸色注文』」『市史研究ふくおか』創刊号

伊藤幸司 2006d 「東アジアを流転した対馬藩主宗義成の外
 交文書—台湾中央研究院所蔵『宗義成書契・別幅』の
 紹介—」『東風西声（九州国立博物館紀要）』第二号

伊藤幸司 2009 「日明交流と肖像画賛」『寧波の美術と海域
 交流』 中国書店

伊藤幸司 2010 「東アジアをまたぐ禪宗世界」 荒野泰典ほ
 か編『日本の対外関係』第四巻、吉川弘文館

今枝愛眞 1970 『中世禪宗史の研究』 東京大学出版会

上里隆史 2006 「琉球那覇の港町と「倭人」居留地」小野正敏ほか編『中世の対外交流―場・ひと・技術―』高志書院

上村観光 1973 「入明使僧妙増都聞に就きて」『五山文学全集』別巻、思文閣出版

上田純一 2000 『九州中世禅宗史の研究』文献出版

上田純一 2006 「足利義満と禅宗―日明国交回復時の禅僧の役割―」河村貞枝代表『平成一四年度〜平成一七年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書 国境をこえる「公共性」の比較史的研究』京都府立大学文学部

榎本 渉 2003 「中世の日本僧と中国語」『歴史と地理』第五六七号

榎本 渉 2006 「元僧無夢曇璽と日本」『禅文化研究所紀要』第二八号

海老根聰郎 1973 「仲猷祖闡・無逸克勤の来朝とその著書作品」『美術研究』第二八七号

海老根聰郎 1975 「寧波の文人と日本人―一五世紀における―」『東京国立博物館紀要』第一二号

大塚紀弘 2003 「中世「禅律」仏教と「禅教律」十宗観」『史学雑誌』第一一二編第九号

大庭 脩 1977 「芳洲文庫の「嘉靖公牘集」について」『関西大学東西学術研究所紀要』第一〇号

岡本 真 2007 「外交文書よりみた十四世紀後期高麗の対日本交渉」佐藤信ほか編『前近代の日本列島と朝鮮半

島』山川出版社

長 節子 2002a 「中世 国境海域の倭と朝鮮」吉川弘文館

長 節子 2002b 「朝鮮前期朝日関係の虚像と実像」『年報朝鮮学』第八号

長 正統 1963 「景徽玄蘇について―一外交僧の出自と法系―」『朝鮮学報』第二九輯

鹿毛敏夫 2008 「戦国大名領国の国際性と海洋性」『史学研究』第二六〇号

河合正治 1968 「西大寺律宗の伝播」『金沢文庫研究』第一四巻第七号

川添昭二 1967 「鎌倉中期の対外関係と博多―承天寺の開創と博多綱首謝国明―」『九州史学』第八八・八九・九〇号

川添昭二 1988 「鎌倉初期の対外関係と博多」『箭内健次編『鎖国日本と国際交流』上巻、吉川弘文館

川添昭二 1983 「鎌倉末期の対外関係と博多―新安沈没船木簡・東福寺・承天寺―」大隅和雄編『鎌倉時代文化伝播の研究』吉川弘文館

川添昭二 1996 「対外関係の史的展開」文献出版

川添昭二 1999 「日蓮とその時代」山喜房仏書林

川本慎自 2003 「伊藤幸司著『中世日本の外交と禅宗』」『日本史研究』第四九〇号

北島 万次 1990 「豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略」校倉書房

國原美佐子 2003 「室町時代の書籍入手」大隅和雄編『文

化史の構想』吉川弘文館

小葉田淳 1941 『中世日支通交貿易史の研究』刀江書院

小葉田淳 1976 『金銀貿易史の研究』法政大学出版局

小葉田淳 1993 『増補中世南島通交貿易史の研究』臨川書店

店

斎藤夏来 2003 『禅宗官寺制度の研究』吉川弘文館

佐伯弘次 1994 『室町前期の日琉交流と外交文書』九州史学』第一一一号

学』第一一一号

佐伯弘次 1999 『室町期の博多商人宗金と東アジア』『史淵』

第一二六輯

佐久間重男 1992 『日明関係史の研究』吉川弘文館

島尾 新 2008 『イマージュのなかの江南—雪舟が描いた

金山寺を中心に—』『中国—社会と文化—』第二三号

関 周一 1997 『室町幕府の朝鮮外交』阿部猛編『日本に

おける王権と封建』東京堂出版

高橋公明 1985 『室町幕府の外交姿勢』『歴史学研究』第五

四六号

高良倉吉 1998 『アジアのなかの琉球王国』吉川弘文館

田代和生 1983 『書き替えられた国書—徳川・朝鮮外交の

舞台裏—』中公新書

田代和生・米谷均 1995 『宗家旧蔵「図書」と木印』『朝鮮

学報』第一五六輯

田中健夫 1959 『中世海外交渉史の研究』東京大学出版会

田中健夫 1975 『中世対外関係史』東京大学出版会

田中健夫 1982 『対外関係と文化交流』思文閣出版

田中健夫 1995 『訳注日本史料 善隣国宝記・新訂続善隣国

宝記』集英社

田中健夫 1996 『前近代の国際交流と外交文書』吉川弘文

館

田中博美 1987 『武家外交の成立と五山禅僧の役割—田中

健夫編『日本前近代の国家と対外関係』吉川弘文館

玉村竹二 1966 『五山文学—大陸文化紹介者としての五山

禅僧の活動—』至文堂

玉村竹二 1979 『臨濟宗幻住派』『日本禅宗史論集』下之一、

思文閣出版

玉村竹二 1981 『相国寺開創春屋妙葩の生活観人生観』『日

本禅宗史論集』下之二、思文閣出版

玉村竹二 1983 『五山禅僧伝記集成』講談社

知名定寛 2000 『古琉球王国と仏教—尚泰久・尚徳・尚真

の仏教政策を中心に—』『南島史学』第五六号

中村栄孝 1965 『日鮮関係史の研究』上巻、吉川弘文館

西尾賢隆 1999 『中世の日中交流と禅宗』吉川弘文館

橋本 雄 1997 『遺朝鮮国書』と幕府・五山—外交文書の

作成と発給—』『日本歴史』第五八九号

橋本 雄 1998a 『遣明船と遣朝鮮船の経営構造』『遙かな

る中世』第一七号

橋本 雄 1998b 『室町幕府外交の成立と中世王権』『歴史

評論』第五八三号

橋本 雄 1999 『丹波国氷上郡佐治荘高源寺所蔵文書』『東

京大学日本史学研究室紀要』第三号

- 橋本 雄 2000a 「丹波国氷上郡佐治荘高源寺所蔵文書
(続)」『東京大学日本史学研究室紀要』第四号
- 橋本 雄 2000b 「室町幕府外交は王権論といかに関わるのか？」『人民の歴史学』第一四五号
- 橋本 雄 2005 『中世日本の国際関係―東アジア通交圏と
偽使問題―』吉川弘文館
- 橋本 雄 2007 「室町政権と東アジア」『日本史研究』第五
三六号
- 橋本 雄 2008 「室町日本の対外観」『歴史評論』第六九七
号
- 葉貫磨哉 1993 『中世禅宗成立史の研究』吉川弘文館
- 藤田明良 2008 「東アジア世界のなかの太平記」市沢哲編
『太平記を読む』吉川弘文館
- 牧田諦亮 1955 『策彦入明記の研究』上巻、法蔵館
- 牧田諦亮 1956 『策彦入明記の研究』下巻、法蔵館
- 三鬼清一郎 1987 「関白外交体制の特質をめぐって」田中
健夫編『日本前近代の国家と対外関係』吉川弘文館
- 村井章介 1988 『アジアのなかの中世日本』校倉書房
- 村井章介 1995 『東アジア往還―漢詩と外交―』朝日新聞
社
- 村井章介 1997 『国境を超えて―東アジア海域世界の中世
―』校倉書房
- 村井章介 1999 『中世日本の内と外』筑摩書房
- 湯谷 稔 1984 『薩涼軒日録が語る遣明貿易・堺南庄』『禅
文化研究所紀要』第一二号